

[育林研究室]A. 主要林木の育種に関する研究

宮島, 寛
九州大学農学部附属演習林 : 助教授

汰木, 達郎
九州大学農学部附属演習林 : 助手

竹原, 幸治
九州大学農学部附属演習林 : 事務官

<https://doi.org/10.15017/1456190>

出版情報 : 演習林研究経過報告. 昭和39年度, pp. 55-56, 1965. 九州大学農学部附属演習林
バージョン :
権利関係 :

育 林 研 究 室

A 主要林木の育種に関する研究

宮 島 寛
汰 木 達 郎
竹 原 幸 治

1 スギ品種の蒐集

- (1) 九州林産株式会社が社有林で選抜した精英樹のつぎ木苗（九林6号、九林9号）の分譲をうけたのでこれの集植を行なった。
- (2) アイチスギ（別名イボスギさし木苗）を林業試験場関西支場より分譲をうけたので集植を行なった。
- (3) 精英樹名変更 先年関西林木育種場山陰支場より分譲をうけた沖の山5号は鳥取署103号へ、沖の山8号は鳥取署104号へそれぞれ名称が変更された。

2. 優良実生苗による選抜

これまで、優良挿木品種および一般実生林から選抜された精英樹候補木のさし木、つぎ木苗の蒐集を行なってきたが、精英樹の選抜はそのほとんどが実生林からの選抜であることからして種子による選抜に対してもさらに検討を加える必要があると考えられる。そのため優良母樹林より個体別に種子の採取を行ないその発芽、生長、変異の巾をしらべ、種子による選抜の基礎的データを得ようと試みた。

- (1) 奈良県吉野地方母樹林採取の実生苗。奈良県吉野郡一帯のいわゆる吉野林業の地域に存在するスギ、ヒノキの母樹林より個体別にスギ14、ヒノキ9系統の種子を採取しこれを奈良（奈良学芸大学苗畑）、盛岡（岩手大学農学部苗畑）福岡（九大粕屋演習林苗畑）の三ヶ所でまきつけ、当面苗畑における環境のちがいによる発芽、生育、個体の変異等を比較検討しようとするものである。さらにこれは毎年母樹より採取し、その種子を数年間連続播種し、年次のちがいによる種々の変異をも観察しようとするものである。
- (2) 奈良県吉野郡北村山林所有の82年生精英樹候補木の实生苗100本を奈良学芸大学より分譲を受け苗畑に移植した。
- (3) 奈良春日山天然杉最大木（推定樹令800年）の枝葉の分譲をうけそのさし木と接木を行なった。

3. ヒノキの樹令別、つぎ木シローンの集植・母樹年令(つぎ木当時1958, 4月現在 8, 14, 23, 33, 55年生)別に各4本づつ計20クローンのつぎ木苗を集植し、採種(採種)園を設定した。

B 省力的育林技術に関する研究

宮 島 寛
汰 木 達 郎
竹 原 幸 治

1. 苗畑除草の時期、回数と苗木の生育との関係

林業苗畑の省力化というと化学的な雑草制御であるところの除草剤の適用のみを問題とする傾向が強く、生態的な除草方法の研究は不充分であると言える。本試験はこのような観点よりある時期の雑草の有無が苗木の生育生存にどのような影響を与えるか、いかにすると、どの時期の除草が最も効果的であるかを明らかにすることを目的としてヒノキの播種床において行なつた。

方 法

試験区は粕屋苗畑の1964年3月播種のヒノキ播種床に設定した。ところでヒノキの生育には稚樹発生当初より夏季までの雑草がとくに影響するものと考え、ヒノキ稚樹の発生・生長の経過から考えてこの期間を初期A(稚樹発生・生長期)、中期B(生長旺盛期)、後期C(生長緩慢期)の3つに大別、この三つの期間の除草の組み合わせの試験区を設けた。1区の大きさ50×50cm、3回反覆とした。雑草は絶乾重を、ヒノキは掘取り後生・乾重、苗高及び根長を測定した。

結 果

1) 雑草量

除草量はその数値からみて雑草のごく小さい時に除草されているのでヒノキの生長への影響は無視してよいと考えられる。従つて除草期間外に発生した残存雑草量が成長に影響を与える雑草量であると考えられる。残存雑草量は全期除草のABCを除けば $BC < AB = AC < A < B < C < \text{Control}$ の順となり中期と後期の除草区BCが最も雑草発生量が少ないことがわかる。雑草量と生育量の間には一般的に雑草量が大きくなる程ヒノキ生育量が減少するという当然の傾向がみられた。

2) 除草時期とヒノキ生育との関係

生育量の差の有意差検定をしてみると全期除草のABC区に対して生育本数、平均